カリキュラム・マネジメントの観点からみる教育実習の指導
—保育実習を中心に「1日の流れ」「日誌」「日案」を考える—

A direction of Teaching and Care Practice on Curriculum Management
—A correlation of Curriculum, Diary and Plan of a day —

加藤　聡一　*KATOH Souichi*

§１　問題設定

本稿では、カリキュラム・マネジメントの視点から、学生が実習で〈主体的・対話的で深く学ぶ〉にはどのような指導が必要か考察する。

保育士の「確保」が急務である（本稿では、主として保育園で働くことに限定する）。「保育士確保連携会議」（2020年２月17日）など具体的な方策が議論されている。保育士の処遇や働き方の改革も重要であるが、「保育士になりたい」「保育の大変さも魅力もわかる」「やっていける自信がもてる」「保育士になる道筋（自分の課題）がみえる」ような保育実習のあり方が議論されはじめている。あわせて、保育実習で体験するその園の保育実践自体が魅力あるものであるかどうかが問われはじめている。保育自体が、〈楽で楽しい〉実践に変えていけるかどうかが根本的な課題である。2019年度のいくつか実習の訪問指導では、はじめの実習においては、「記録を書くのが大変」「指導案をきちんとつくらないとだめ」というより、保育の魅力や楽しさを実感してもらう方向に明らかに変わってきている。学生への「対応」が「ていねいでやさしく」なっていると感じる。同時に、やはり保育士の力量をつけなければいけない課題もあり、「楽しく子どもとふれあう」だけではだめで、それをどうするかが悩みどころとなっている。

園ごとに、保育園での実習生への対応は、子どもへの保育、保護者への対応と強い共通性があると感じている。保育のあり方・保育園のあり方と保育実習のあり方は、歩調をあわせて改革していく必要がある。

私と教育実習の関わりは、基本的には、訪問指導を担当することになった学生とゼミの学生への指導が中心である。同時に、「子ども学総論」（１年前期）、「教育課程論」（２年後期）、「教育方法論」（３年後期）の担当授業で、いわば「事前指導」「事後指導」と「併走」するようにしている。「教育課程論」「教育方法論」は、幼稚園教諭・小学校教諭の免許必修科目であるが、本学部のカリキュラム・ポリシーに基づいて、保育実習も強く意識したものにしている。

このなかで、とりわけ、実習に対して受け身・指示待ちで、自分の実習のカリキュラム・マネジメントができないがゆえに、自信をなくして帰学する学生が多いことに気づいてきた。年々の試行錯誤ではあるが、これについて、私が取り組んでいることを報告し、考察したい。

人間発達学部でも、年々一般企業就職者が増え、公立保育園・認定こども園の就職者は

少ない。３年ほど前までは、私立の保育園の就職者が多かったが、その層が、一般企業もしくは幼稚園就職に「流れて」いく傾向が強い。この就職指導・進路指導についてはなかなか学部でも議論できておらず、私は自分の授業やゼミの受講者を通しての把握にとどまっている。これも課題である。「保育士就職促進支援事業費補助金」では、「卒業予定者に占める｛保育所等｝対象施設への就職内定の割合（内定割合）」が前年度の全国平均を上回っていることが対象条件で、2019年度の場合、58％以上となる。本学部は、小学校教諭への志望者が増えているという「ハンディ」があるが、養成施設の存在意義をかけて、一定数の保育士を育てる必要はあると考える。本学部の場合、しっかりした保育士を現場に送ることこそ、最大の地域貢献になる。

この問題について結論を先取りして言うと、ここ３年ほど、１・２年次での０〜３歳児の学びと実際の関わりの機会がほとんどなくなってきている問題がある。幼児との関わりはあって、幼稚園にボランティアやお手伝いで行く機会はあるが、機会費用の考えでみると、その積極性がかえって０〜３歳児を学ぶ機会をなくしている。この経験がないままだと１回目の実習でうまく０〜３歳児と関われなかった場合、自信をなくして、保育士を進路からはずしかねない。自信を回復する機会がないと、続く幼稚園実習は「うまく」「楽しく」できるため、２回目の保育実習で０〜３歳児を担当することになって決定的に自信をなくすことがある。幼稚園実習がうまくいかない場合は、一般企業を選択肢で勧められてしまった場合、子どもと関わりたい初心を封印する可能性がある。時々の「回復」「立ち直り」の機会をどうつくるかに取り組んでいる。

§２　授業とゼミでの関わり

本学部のアドミッション・ポリシーは、「保育士、幼稚園・小学校教諭などを希望し、進路を幅広く人間形成の中で考えようとする人、経験から深く学び自他の成長をはかっていこうとする人」であり、ディプロマ・ポリシーは「保育・教育の理論とスキルを学び、実習等の経験を積み上げ、芸術的感性を備え、教育・福祉の両面で、子どもの成長・発達を支える力を獲得する」であり、カリキュラム・ポリシーは「保育士養成課程、幼稚園および小学校教諭養成課程の３課程を創造的・計画的に組み合わせて学び、総合的に人間形成をはかり、進路を明確にするカリキュラム」である（2018年度入学生まで）。

教育実習を節に、授業との往還をはかり、教育実習の経験を次の教育実習に活かし、積み上げていくことを図っている。あわせて、３つの資格・免許をどの授業も意識するカリキュラム・ポリシーが特色で、例えば、保育士資格のみ取得の学生でも、子どもたちが卒園後小学校でどういう教育を受けるのかがわかっていたり、児童福祉施設で働く場合も、小学校の勉強をいっしょにやれたりすることを想定している。

なお、2018年度入学生より、コース制が導入され、１年次は共通意識が強いものの、２年次からは４つのコースに分かれて、より進路を明確に持った形で学習していけるしくみ

に変革している。

私の担当授業との関係は表1の通りである。

表1　実習と授業の関係

学年	1年	2年	3年
保育士資格		保育所実習Ⅰ	保育所実習Ⅱ
幼稚園免許		クリエ幼稚園実習	幼稚園実習
担当授業	子ども学総論	教育課程論	教育方法論

「教育課程論」は2年後期配当で、附属クリエ幼稚園での5日の実習が1年を通して数人ずつ五月雨式に行われるなか、授業終了後の2月の保育実習（2週間）を目指す位置にある。「教育方法論」は3年後期配当で、1～2回講義をやったあと、3週間の幼稚園実習に行き（小学校実習も同時）、帰学後、それをふり返りつつ、授業終了後の2月の2回目の保育実習（2週間）を目指す位置にある。

実習との関係を意識しはじめたのは、「教育方法論」からで、幼稚園実習の〈ダメージ〉が授業の受講姿勢にまで強く影響することが感じられるようになった。全体像は把握できていないが、どうもそういう学生は1回目の保育実習ですでに自信をなくしている場合が多いようである。

「教育方法論」でいうと、3年前から、実習後の課題として、実習で行った指導案のふり返りをしている。これをねらいのあり方や、記録の取り方、『保育所保育指針』との関係づけ、展開の方法、保育観、子ども理会、教材の連続性などの視点の学びを加えて〈略原案〉に書き直す作業を行う。最後には「デザイン学部レビュー展」での教材研究を踏まえて、新しく略原案を作成して総まとめとし、直後の保育実習に備える。

ここで様々な問題がわかってきた。

① 一番の問題は、実習で子どもの姿が見えていない場合が多いことである。指導案を左にして、右側に白紙をおく。そして、子どもたちが何をしていたか、どんなことを話していたか、どんなものをどんなふうにつくったか、思い出す限り書くことが、指導案を書き直す前の基礎作業となるが、「覚えていない」学生が多い。

これには、実習が、保育者の動きを追うこと、指導案が保育者の動きに子どもをあわせていくような指導観をもってしまっているためだと考えられる。時間通り終わらなかったなど自分の動きの反省は記憶にあるが、その時、子ども一人一人が何をしていたかまでは見られていない。

また、反省会も、実習生の動きが主で、あの時あの子がこんなことしていた、などと子どもの姿が語られないと、ますます学生の記憶から消えていく。指導案が実施にとどまって、計画で予想された子どもの反応と、どう予想通りでどこがちがったのか、記録しておく作業が行われていない場合が多い。計画通りできなかっただけのことを実習生は「失敗」ととらえやすいが、子どもの様々な姿をとらえて次に活かせないことがほんとうの「失敗」につながると考える。

毎日の「実習の記録」（以下「日誌」とする）での子どもの姿の把握の視点がちがうようである。この実習の段階でも、担当した年齢の子どもたちの姿——何をやろうとするのか、何ができるのか——を学生はつかめていない。「うまく」いかなくて当たり前なのである。この年齢の子どもたちはこんなことするのかと、ここで把握しておけば、次の指導案からだんだん〈ヒント〉が合ってくるのである。

実習に行く前に、この課題の趣旨を指示しているが、その時点で理解がなく、なかなか徹底していない。

② そもそも全日実習を行わない場合もある（減ってきているようだが）。3週間だが「本実習」なので、部分実習—半日実習—全日実習と進めてほしいが、運動会シーズンでもあり、「最悪」、3週間運動会の手伝い（しかも「裏方」的な仕事）で終わる場合がある。日常保育の「お手伝い」にとどまる場合も多い。これだと「子どもと楽しくふれあって」楽しいといえば楽しいし、計画を考えなくてよいので「楽」ではある。しかし保育としての力量はつかないので、大きな〈子どもの一人〉として楽しい思い出で終わる場合がある。幼稚園実習で全日実習をしない場合、保育実習で（しかも2週間しかない）はじめて全日実習をやることになり、しかもそれが経験のない0～3歳児担当、さらに2週目にはじめて入るクラスだと、学生のストレスは大きくなる。幼稚園実習では幼児で全日実習を行い、保育実習では4～6歳児を担当した場合、子ども理解に通じるところがあり、うまくやれて自信を持てるのはたいへんよいことなのだが、0～2歳児については「空白」のままなので、それを強く意識して何らかの形で自分で補わないと、採用の面接などで自信を持った受け答えができない。

何らかの事情で（あるいは意欲のない学生には「積極的」に）、実質「実習」とはいえない経験になる場合もある。ボランティアの育成ならまだ意味があるかもしれないが、これだとそれなりの保育の課題に直面したとき、ただちに自信を失って進路を変更する〈準備〉になってしまう。

根本的に、実習とは、担当の保育者の動きをよく見て、まねから入って、だんだん〈成り代わっていく〉練習である。読み聞かせや手遊び、ピアノの演奏、朝の会の進行などやれるところから積極的に〈成り代わって〉やっていく。その時間が延びて、部分実習、半日実習、全日実習になる。全日実習は朝から晩まで1日〈成り代わる〉のである。そのための観察、日誌、日案づくりなのである。ここがおさえられていないと、何をしていいかわからなくなる。指示に従って手伝っているだけだと、〈成り代わる〉ことはできない。

③ 教育実習のカリキュラム・マネジメントができていない。保育実習では、実習の日程表が「実習の記録」に入っていない。今年度（2019年度）は、「1日の流れ」とともに

「実習の流れ」のプリントも作って、実習前に提出させ、また帰学後に記録の形で書き直した（書き足した）ものを提出する課題を出した。ともに白紙に近かったり、雑だったりする場合は、実習が厳しかった可能性が高い。これについては次節で述べる。

3年では遅いかと思い、2年の「教育課程論」でも最後に急きょプリントを配布しワンポイントアドバイスを行ったが、ほとんど伝えられなかった。訪問指導に行った実習生で、しっかりそれをつくって、また園とも相談・交渉した学生は、不要なストレスを最小限にして、ほんらいの実習に集中できたようである。今後につなげたい。

特に、園に実習直前指導で行く場合、保護者向けのわかりやすい『しおり』などをいただいて、また実習のカリキュラムを相談すべきだが、クリエ実習の経験を引きずって、「マナーを守って笑顔で元気にあいさつ」だけの学生は実習が厳しくなるので、クリエ実習とはちがう旨、授業でも強調した。

④　1年配当の「子ども学総論」は、2018年度にオムニバスの担当となり、1回、中学生の発達について講義したものの、2019年度は事実上演習（ゼミ）となり、全体的な発達を入門として学ぶ機会はなくなった。2年3年の授業での教育力が下がったように感じる。

§3　実習までに（子どもの発達と園の環境の把握）

2018年度、2019年度と2年続けて1年ゼミのとりまとめ役を行った。

1年目の2018年度はコース制導入1期生となり、この時は共通することを学びながら「進路にうまく迷う」のがテーマで、後期に、全員、ゼミごとに師勝北小学校とクリエ幼稚園を訪問した。マナーの確認と子どもの様子を見る・ふれあうのが課題だった。小学校と保育園・幼稚園の概要については前期で北名古屋市紹介の際、資料を配付して説明はしてある。訪問に際して、学びとしての事前指導・事後指導は学年としては行わなかった。私のゼミでは、事前に発達年齢の特徴をまとめ、ゼミで報告する機会を持ってみたが、子どもの発達をまとめることに全く興味を感じない学生が多いのに驚いた。しっかりまとめた学生は、ふり返りの機会がなかったが、保育実習などに活かされつつある。

2年目は、コース制導入2年目で、ほとんど進路を決めて入学してくる学生が増えた。そこで、進路を経験してうまく「迷って」もらう方針を転換し、すでに考えている進路をさらに具体的に考えつつ、それ以外のことにも視野を広く興味をもってもらうよう指導方針を考えた。後期の施設訪問では、師勝北小学校、クリエ幼稚園、久地野保育園、児童福祉施設ともいきの4か所を計画し、希望に合わせて1か所に行く形にした。保育園で0～3歳児に関わる機会ははじめてつくった。あわせて、事前・事後の学ぶ機会を保証した。

久地野保育園の訪問（9名）では、0～2歳児クラスに入るので、「発達表」から年齢の発達的特徴を子どものイラストをまん中にしてまとめた（「発達図」）。本訪問の前に、子どもの少ない夕方に事前訪問し、入るクラスを確認し、部屋の様子をスケッチして「環境図」を作成した。前提として『保育園のしおり』を見て、場所、1日の流れ、施設内環境、園の方針、行事日程、子どもの持ち物などについて学んだ。本訪問終了後、2つの図に、わかったこと、発見したこと、気づいたことを思い出して書き出す作業をした。0～2歳児と関わるのが初めての学生が多かったが、いろいろなことが書き出せた。無茶ぶりだったかもしれないが、急きょ日誌の用紙に書かせてみると、書くのが苦手な学生も15分ほどで1ページは書き、持ち帰った学生は裏表2ページ書けた。

学生が実際作成したものは綴じて、「久地野保育園訪問（「子ども学演習」）まとめ」を作成した。この方向でよいのかどうか、1年ゼミ担当者、次年度1年ゼミ担当者、保育園関係者に配布して議論していきたい。当事者の9名にも配布する。これが実際の実習にどうつながるか、私の授業で併走しながら状況をつかんでいきたい。

園の直前指導までに、「発達図」「環境図」を使う記録の取り方を練習しておけばよいとの手応えが確かに得られた。また、直前指導の際、『しおり』をいただく大切さも改めてわかった。なお、小学校の実習では必要な資料は学校側から一式渡され、実習がはじまってからその説明と学習をする時間をとる場合が多い。保育園の場合は、学生から積極的に申し出ないと、ただ「あいさつ」で終わってしまうことがある。

環境の観察を事前訪問でしておいた。日誌の書き方も実習に対してはかなり前に行ったことになる。必要な作業について、なるべく事前に「分けて」行うことが大切だと気づいた。そうしないと、実習初日にすべてを行うことになり、困難を生みかねない。またこのような練習をしておかないと、ある意味、実習に送り出しても園も指導に困られ、ていねいに指導いただいても申し訳なく感じる。

子どもの発達の特徴をまとめることについて、今回は、現役の保育士も学ぶレベルの0から7歳までの「発達の検討の表」（田中昌人・杉恵『子どもの発達と診断』大月書店）を使用した。1年生には、B4版表裏で簡単にまとめてある0から6歳までの発達表を配布しているが、ほとんど使う機会がない。むしろ詳細なものを使って、実習に行くごとに、わかるところを少しずつ増やしていく方が使いやすい手応えを得た。これは、「子どもの発達と障がい」ゼミの卒業論文で二村峻介論文（2018年度提出）が発達表で劇発表を分析し、萩野裕貴論文（2019年度提出）が発達表で子どものスイミングスクールでの様子を分析した研究成果に根拠を持つ。

保育園でも「発達を学ぶよりたくさん子どもとふれあって」という考えを聞くが、理論の学習を先行もしくは並行しないと、現在の様々な問題に対応できる力はつきにくい。根本には、発達表を「スタンダード」と見まちがえてしまい、できるできないで一喜一憂してしまう保育への反感があると思われるが、今子どもにどういう力があるかの把握、問題と思われる行動の底に、それを変えていくどんな発達の力があるか、など発達のとらえ方自体を学び、共有していきたい。

この発達表とあわせて、『発達のみちすじと保育課題（別表）』（習志野市・平成15年）も使い始めている。これには保育内容の例示も書いてあり、他に出版されている週案の学

習で補うと発達の理解が進みやすい。

ゼミや訪問指導した学生が、発達表を見ながら日々新しい発見をした、などと成果を出しつつあるので、引き続き取り組みたい。

なお、2018年度から実施されている『保育所保育指針』には、発達の章がなくなった。「保育の内容」が、「乳児保育」「1歳以上3歳未満児の保育」「3歳以上児の保育」の3段階になって詳しく書かれて分量も増えた。前の指針では、1歳3か月で節をおいていた。新しい指針では、例えば〈1歳半の発達の節〉はとらえにくい。つまり、子どもの発達を踏まえた保育をしようとするには使いにくいものになって、発達表などで補わないと理解しにくくなった。発達について国家基準にするのはどうかなどの理由で削除されたが、それだと「保育の内容」もより簡潔にする必要があると考えられる。

§4　実習の流れ

「実習の流れ」について、幼稚園実習の経験を踏まえ、保育実習では次の表2をつくって参考として配布した。3年生は幼稚園実習の経験を活かす機会となった。

表2　実習の流れ

月日	主な行事など	実習の流れ 責任実習（成り代わる）	その準備	入る クラス	メモ
2/9 日					
10 月		初日			
11 火					
12 水					
13 木					
14 金					
15 土					
16 日					
17 月					
18 火					
19 水					
20 木					
21 金					
22 土					
23 日					
24 月					
25 火					
26 水					
		実習の記録提出			
		実習の記録返却受け取り			

以下、この表2での指導の留意点について述べる。

①　まず行事をおさえる。園で便りなど出している場合参考になる。場合によったら実習初日に把握することになる。他に出版されているもので同時期の週案をいくつかみておくと、この時期・季節の流れが把握できる。節分が終わってひな祭りをめざす時期となる。健康診断や誕生会など細かい行事も多い。

②　入るクラスについておさえる。園の直前指導で確定していれば様々な具体的準備ができる。確定しない場合は、いつ決まるのかなど聞いておく。急な変更もあり得るので、その心構えをしておく。入るクラスが急に変わって「無駄」になった準備は、現場に出てからの保育の準備にする。

担当クラスについては、幼稚園実習などで担当する年齢も考えて、希望は言うようにする。これまでの経験や課題にしていることを充分「自己紹介」として園に伝えることが必要である。

このごろは、1回目の実習であっても、2週間同じクラスに入ることが増えているように感じる。2週目に部分実習がある場合は、そのクラスの様子をつかむ意味で1週目から同じクラスにはいるとたいへんやりやすい。1週目はいろいろな年齢クラスを順次経験する形の場合でも、1週目の早い時期に部分実習をするクラスに入れてもらって、子どもの様子を把握したい。そうしないと子どものイメージが持てないので指導案を書くのが困難になる。

③　〈成り代わる〉流れをおさえる。部分実習、半日実習、全日実習の予定を入れる。読み聞かせやピアノはいつからどのクラスで担当するか決める。2年2月の1回目の実習では、指導案をつくる活動は大学からはお願いしていないが、園によっていろいろである。だいたい、1、2回の部分実習までのところが多いようである。半日実習や全日実習はこの段階では「無理」なので、園に大学のカリキュラムと学びの段階を説明して、しないよう（翌年に延ばすよう）相談・交渉するのが望ましい。難しい場合は、大学に相談する。交渉できずに全日実習までやってしまった学生には、ケアが必要である。

④　部分実習などの〈準備〉を逆算して表に書き込む。2週目に部分実習があるなら、1週目はじめには指導案を一度見てもらい、修正が2～3度とできるようマネジメントする。見てもらう日や時間も直前指導の段階でおおよそ決まっているとやりやすい。実習がはじまると、保育士も忙しそうなので、声がかけられないでいて、検討が受けられないと大変である。最悪、1週目の終わりにはじめて指導案を見せてやっと書く力がないことがわかり指導もやりようがなくなると、実習生も悲しくなる。精神的にも追い込まれてしまう。初日に3つ程度指導案を持ってこいといわれるケースが増えている。園の状況も見てこの中からどれにするか決め、子どもの様子を聞きながら何度か修正していくのがよい。また初日に持っていったものが全部通らない場合がある。その園に合っていなかったり、準備の時間がなかったり、定番ものだとすでにやったりしている場合がある。

実は部分実習は難しい。子どもの様子がしっかりつかめていないだけでなく、子どもにとっては「突然」なじみのない新しいことをやられるので、子どもの方も対応しにくい。なるべくシンプルで発達的意味は豊富なものにしたい。〈成り代わる〉のが目標であるから、理想は1週目に担当の保育者が行っている主活動（設定保育）を見せてもらい、その指導案をいただくか、なければ自分で〈復元〉する。導入や展開など、なるべく進め方は同じにして、やること（内容）を変える要領で行う。内容も、保育者がやられたことの〈続き〉になると大変やりやすく、子どもとのやりとりや子ども理会に集中できる。内容が新規な場合でも、2週間の流れのなかで行うようにして、自由遊びの時間などに「予告」したり数人で「リハーサル」したりするとよい。これぞカリキュラム・マネジメントである。

また、〈つくって—あそぶ〉場合、これも実習という限られた場なので難しい。勤務している場合は、つくるのに数日、遊ぶのに数日、というように、週単位ないし月単位でゆったりじっくり取り組むようマネジメントできるからである。

⑤　できればふつうの〈観察〉をする機会を持ちたい。観察には大きく、ふつうの観察と参与観察の2種類がある。ふつうの観察は、空気のような存在になって観察し、実践に介入しない。参与観察は子どもたちと関わりながらの観察になる。保育実習では、ふつうの観察の機会がないところが多い。小学校実習の場合だと、ふつうの授業観察（見学・参観）を何時間も行う。子どもと関わりながらの観察はたいへんである。小学校のように、見学だけの時間をいただけると、いろいろなことが見え、記録できる。保育園では、ふつうの観察をしていると「子どもと関わるのが消極的」と誤解されやすい。なかなか難しい現状ではあるが、充分相談してみることが必要である。また小学校実習では、意図的に、記録をまとめたり指導案を書いたり（教材研究）する時間を何曜何限と何時間も決めている。そのような時間が確保されると、保育士も「働きやすく」なるように思う。

⑥　はじめに想定した予定通りは進まない。保育園だと子どもや保育士に合わせて刻々と変わっていくのが普通であり、そういう臨機応変のやり方を「楽しむ」ことが大事である。変わっていくことを刻々と相談・調整していくのが同僚性の練習になる。これも実習生から発言したり理由を把握したりしていく必要がある。

⑦　様々なことを初日から一気に把握し、翌週に〈成り代わっていく〉のはやはりたいへんなことである。そこが就職したいところであったらできれば事前にボランティアなどで何度か関わりが持てるとよい。話しやすい保育者と出会ったり、受け持ちそうな子どもと仲良くなったり、あるいは部屋や園の環境も把握できていると、余裕を持って実習に臨める。

§5　「1日の流れ」から「日誌」そして「日案」へ

ここでは、「1日の流れ」から「日誌」そして「日案」への流れと関係を述べる。

展開の部分はおおむね次の表3のようになる。

表3　「1日の流れ」

時間・事項	子どもの動き	保育者・実習生の動き	メモ
		出勤 帰宅 持ち帰り仕事（　　）時間	

①　なによりも大事なことは、「1日の流れ」「日誌」「日案」・指導案の書き方は、その園、あるいは保育者によって、書式も内容もちがうということである。大学では、より本質的なことを教え、とりあえず書式を固定して練習してその本質的なことを確かめることしかできない。各自で実習先の〈文化〉をいち早く聞いてつかむことが大事である。

基本は、時間・事項の列と、保育者のやること（環境）と子どもの動きの2列。そしてそれへのコメント（気づき・疑問）を書く欄の全4列であろう。保育者の欄と子どもの欄は入れかわる場合もある。

②　記録は、提出するものと〈自分のもの〉を区別してつくる。〈自分のもの〉とは、その日の実践について、思い出せる限り子どもの様子や保育者のやったことを書き出していくものである。自分がわかればよいので、書式などなくてよい。20分の取り組みも思い出して書くとなると、何倍もかかる。しかしこれは実践者の基礎トレーニングとして大変有効なものである。この地道な作業によって、もうひとつの〈記録カメラ〉が頭の中で自動的に起動するようになり、子どものことが見えたり、保育のいろいろな工夫が思いついたりする力量がつく。一方で提出する日誌は、そのごく一部となる。アピールすべきことを選んで、これは！と思うことを書いていく。先に短時間で日誌を書くようにし、時間のある限り、忘れないうちに〈自分のもの〉をつくるとよいと思う。保育者の方からは、記録に書かれたものから、そこに書かれていないがおそらく〈自分のもの〉には書いているであろうことをうまく〈聞き出して〉くれると、何を書いたらよいか／書かなくてよいかがどんどんわかってくる。

③　「1日の流れ」は本学部の「実習の記録」では、「デイリープログラム」となっている。幼稚園実習の記録にはついていないので自分でつくる。「1日の流れ」は、事前に把握しておくことが望ましいが、刻々と変わるので、大まかな流れを実習の1日目（初日）で具体的につかんで書く……とこれが1日目の「日誌」になる。子どもの動きと保育者の動きはまだ関連が薄い。

1日目の日誌のあとの日誌は、次の表4のように、両者の関係をつかんでいく。網掛けの右部分のコメントは、網掛けの保育者もしくは子どものみについて書く。実際は、スペースの関係で、空白をつくって互い違いに書くことはせず、詰めて書くので入り乱れてわかりにくくなるが、本質は互い違いである。Cの子どもの動きは、Bの準備や声かけが〈原

因〉だったことをつかむ。子どもをCで「動かす」には、Bをまねすればよいことになる。また子どもがAしたとき、保育者がどう対応するのかがBになる。Aは、なぜ保育士がBしたのかの理由や根拠になる。ここをつかむことで、保育の〈意味〉がつかめてくる。

園の指導では、このつながりが見えて記録に出ているときは評価し、つながりが見えそうだが書いていないときはぜひ語って、実地につながりがつかめるよう助けていただければありがたい。あわせて、保育者がなぜそうするのか、その子どもをどう見ているのかの〈こころ〉をぜひ実習生に語っていただきたい。〈こころ〉はなかなか外から見えないので、実習生がつかむのはかなり困難である。しかしこの〈こころ〉の理解こそが、保育の楽しさ・魅力の核心なので、日誌を手がかりにぜひ伝えてほしい。また、0～1歳児では、子どもも言葉で語りにくいので、できれば〈こころ〉を刻々とひとりごとのように語っていただければと思う。これで実習生は漫然と昨日の繰り返しでなく細かく見ると日々発見があること、小さなドラマがたくさんあることに気づく。実習生はひとりごとを聞いて受けとめたことを、日誌に書き込めば取り組みやすい。

表4　子どもの動きと保育者の動きの関係づけ

時間・事項	子どもの動き	保育者・実習生の動き	コメント
	A		
		B	
	C		

④　次の表5のように「1日の流れ」を枠組みとして、日誌が積み重なり、それが「日案」になる。過去の記録を未来に向けて書くと、計画や指導案になる。他の人がやったことを自分がやることに変換していく。

表5　「1日の流れ」「日誌」「日案」の関係

1日の流れ			日誌			日誌			日誌			日案	
子	保	→	子	保	→	子	保	→	子	保	→	子	保

あるクラスに入っての1日目の日誌が、「1日の流れ」を具体的におさえたものになることは先に述べた。よくある実習生の悩みは、1日目の日誌を詳しく書いたら次の日から書くことがなくなると思うことである。次の日誌からは、その事項について、1つは発見したことを書き加えていけばよい。「トイレに順番に行く」だったら、そこでの声かけ、子どもの様子を毎日書き足していく。2日目からは、1日目の事項を疑問形にして、日々答えていく要領でよい。「トイレに順番に行くとは（詳しくは）？」に答えるのである。

事項を均等にする必要はない。朝の様子を詳しく書いたら、午後は各事項1つの代表的な記述でよい。そして「本日の実習のねらい」に、「朝、登園してから朝の会までの子どもの動きのまとまりぐあいを見る」のように、重点を置いたものをねらいとする。3年の実習では、あらかじめねらいを決めて見ていくこともできはじめる。とりわけ詳しく見たものは独立させて（場合によったら「別紙」）、「場面の記録」とするのである。

記録を「日案」にするために大事なことは、保育者が子どもを次の活動に「動かす」、〈キュー〉の言葉かけ・動作をしっかりつかむことである。保育者の動きを、〈進める〉〈うずを戻す〉〈しめる〉の3つで考えたとき、見学やお手伝いの立場だと、流れからはずれた子どもへの個別対応（〈うずを戻す〉）がやりやすいし記憶にも残る。次いで、子どもが次の活動に移っていくとき、最後に残された子どもに対応したり、後片付けをしたりする（〈しめる〉）のもわかりやすい。しかし〈成り代わって〉保育の流れをつくっていくには、何よりも〈進める〉ことができなければならない。ここはかなり〈成り代わる〉意識を強く持って見ていないとつかめない。声かけについては、指導案に書かないにしても子どもに言う文章自体を考えておきたい。これはという言葉かけは、子どもに言う文章まで考える。

§6　部分実習に向けてのアドバイスと〈楽で楽しい〉保育のあり方

3年生の「教育方法論」では、実際の子どもの反応をつかみ今度はそれに合わせて指導案をつくること、全員に同じことをやらせるのは無理（たいへん）だからある程度幅のある活動が展開するようにすること、教材は発展系列で考えて将来すごいものになることを想定しつつも子どもに合わせて（adapted）本質を保存しつつシンプルにすることなど学んだ。これは、子ども全員に同じことをさせるために多くを配慮し、そのために多大な準備を負担する（「みばえ」を気にする）保育ではなく、子どもに合わせてシンプルだが、細かい一つひとつに発達的意味を見出し、それを同僚や保護者とエンジョイしていく、〈楽で楽しい〉保育につながっていくのではないかと考える。2年生へのワンポイントアドバイスとして以下のように実習生に送った。

①　（☆）なによりも、その単元で子どもがどういうふうにあそぶか、なるべく子どもごとに（何人分か）具体的に予想・想像すること。少し「はずれる」場合も想定する。

同じものを全員に作らせるのではなく、バリエーションが出るように進める。好きなものを作らせる、では反応が広すぎるので、絞るようにする。「みのむしをつくろう」では広すぎるので「あったかいなあというみのむしをつくろう」というように「限定」を加えていくことをあれこれ考えてほしい。

② そういうふうにあそぶために、どうすればいいか、展開（手順）、具体的声かけを考える。☆があってはじめて具体的に、環境構成、何を準備すればよいか、どういう配慮をすればよいかなどが考えられる。複雑すぎる場合は、題材をよりシンプルなものに変えて、また①の作業をする。

③ だいたい流れができたら、この活動で子どもたちの人生がどう変わり、どう豊かになるのかを考える。それをねらいとする。このねらいが確定した段階で、また①②を繰り返して、ねらいが「ねらわれている」ように書く。ねらいはまず自分の言葉で書くが、『保育所保育指針』第2章から対応する文章をさがしてその文章を活用して書く。

④ 実習での、しかも2週間しかない実習では、「目新しい」ことはできない。子どもからみれば、なるべく日常の文化の延長で取り組んでとまどわないようにしたい。そのためには、1週目に、保育者の行う部分（設定保育）を観察して、指導案を「復元」しておくのがよい（記録にして提出してもよい）。これを参考にまねできるところはまねして②を考える。説明のしかたや導入のあり方、席の座り方、準備する道具の種類や置き場所など、なるべく「まね」にする。内容が「ちがう」ようにする（理想は、保育者のやった活動の「つづき」にできると内容もやりやすい）。1週目にまねすることを見ていない場合は、大変になる。保育者とよく相談して、話で聞いて指導案をつくるしかない。部分実習の直前になっても、まねる元の活動を指導案に活かすべくよく見ることが大切である。

（1週目に指導案の「復元」ができないと結構たいへん。次回の実習でカリキュラム・マネジメントしてください。）

⑤ 一番大変なのは、☆（①）で、実習生は、特に年齢（発達段階）にピントが合っていない。だからうまくはいかない。保育者に様子を聞いてやってみるしかない。特にはじめて0～2歳児でやる場合、把握が追いついていないのは当たり前。大事なのは、今回の部分実習で、この年齢の子どもはこういうことができる／できないんだ、こういうことがしたいんだ、という子どもの姿をつかむことが大事で、それを記録して次回の実習の準備にしよう。園によっては、一度やって、うまくいかないながら子どもの反応をつかんで翌日に同じ内容でもう一度やるというやり方をする園があるようだ。これはよいやり方に思う。すぐ2回目ができない場合は、実習後に機会が持てるといい。

つまり、一度やってみてはじめて指導案が考えられるようになるということ。そして、予想からはずれるのはあたりまえで、それを怖がるのではなく、こんなことするのかーなどと「楽しみ」、次の指導案に活かしていく姿勢が大事である。

ここまで紹介した作業で、「実習」の意味と取り組み方がわかって、「立ち直って」実習に臨む学生が何人も出てきた。発達表を使って実習し、訪問指導の際、子どものことや保育のアイディアで話し込んだ学生も出てきた。

3年次には働くのがいやだと言っていたが、4年生になってやはり保育園や幼稚園をめざしたいという学生が何人もいた。授業で、センスがよくこういう学生に保育者になってもらいたいと思う学生が、その業界に高い志があるわけでもなく金融や食品関係企業に就職するのはやはり残念に思う。

時々の不要なストレスを回避し、実習ごとに、立ち直ったり自信を持ち直したりして、初心を活かしてほしい——そのために試行錯誤している。

参考文献

「保育士確保連携会議」（2020年2月17日）資料
「久地野保育園訪問（「子ども学演習」）まとめ」（加藤聡一作成資料）
田中昌人・杉恵『子どもの発達と診断』大月書店、1981～1984年
二村峻介卒業論文「幼児の全身運動の発達的特徴　—年少・年中・年長組の劇発表の縦断的研究—」（2018年度提出）
萩野裕貴卒業論文「3～4歳児のスイミングスクールにおける保育の発達的根拠　—観察記録から見る子どもの成長と安全—」（2019年度提出）
習志野市『習志野市就学前子どもの保育一元カリキュラム指針　発達のみちすじと保育課題（別表）』2003年